I) はじめに　時代を変えた男たち

源頼朝と織田信長、豊臣秀吉と徳川家康は、国民大多数が理解しているが、時の天下人とは異なる、主流でない武士集団が、弱小軍団同志でタッグを組み、鎌倉幕府の創建に大きく貢献した。即ち三浦一族と千葉一族である。
鎌倉に幕府を創建した頼朝は朝廷からの脱皮を図り、武士中心の大名（国土）を任命し、人事権を掌握した。
信長は既得権を打破した（高野山焼き討ち、一向衆壊滅、築城等々）
秀吉は太閤検地による土地の私有や納税を行った。しかし朝鮮半島の征服に失敗、病死。家康は国土の整備や士農工商制定、等々。
千葉一族は身内の繁栄中心に孫など次世代に権限を任せ、禁じ手を護らせた（身の丈に合わせ慎み、上司に従え、強欲を望むな等々）。(かつ人格円満で周囲に信頼されること)。
源氏から大将として関東に参戦を促したが、平忠常の乱しかり、前九年の戦いには佐竹氏は参戦せず（本来源氏の出）、しかも平泉の藤原氏討伐も無視し、関東の平家一門は源氏に従うことを避けた。故に同じ平家一門から三浦一族と千葉一族だけは率先して参戦した。

一方、国政は、未熟かつ、不平等で、貧富の差もあり、未開の地域あり、国として国民の生活は、生活難に苦労と不満で不安定であった。
事のきっかけは、国のトップ（天皇）から未開拓土地の征服（征夷大将軍）を指命された源頼信と頼義は関東の有力者に参戦を依頼したが、周辺の有力者（大半の平氏）は、応答なく、かつ、常陸の国司の佐竹氏（本来は源氏）も応じなかった。
此処に、快諾したのが、三浦一族と千葉一族、比企一族であった。あの人望篤い家族の三浦と千葉が戦闘に参戦する、は関東の地域に心ある人たちは三々五々に参戦した。

そして前九年の役では、東北地方は三浦一族と千葉一族そして秩父一族が総掛かりで、戦闘集団の食糧や兵士の交代含め、厳寒の地で戦った。勿来、白河関を越え政府の橋頭堡の多賀城へ短時間で移動が出来た。
（なお、比企一族の島津忠久は激しい戦の中で、目覚ましい戦闘集団の指揮をとりつづけ、大きな戦果を挙げた。この戦で、戦後彼は頼朝から御家人に指名されたし、鹿児島の国司に赴任した）

逆に相馬御厨の確執（磐城の常陸の国国司の佐竹氏が千葉の所有権を朝廷からの命令で奪い取った）事件が起った千葉一族は欠かさず伊勢神宮へ生産物を献上していたが）、平の清盛と朝廷からの密約での判断であろう。
後、鎌倉幕府樹立後、佐竹攻略に打って出たが、佐竹は戦わず礼を尽くし降伏した。結果、佐竹は秋田へ転封され、佐竹の旧領地は千葉一族がそっくり受け取った。ここに、千葉一族の今の福島県への移転が決まった。

織田信長の統一

織田信長は桶狭間の戦いを皮切りに，約20年間にわたって全国統一を推進したが，本能寺の変で倒され，天下布武は未完に終わった。

年	おもなできごと
1534	尾張で生まれる
1548	美濃の斎藤道三の娘と結婚する
1555	尾張の清洲城に移る
1559	尾張を統一する
1560	桶狭間の戦いで今川義元を破る
1567	稲葉山城の戦いで斎藤竜興を破る
1568	足利義昭をたてて京都にはいる
1570	姉川の戦いで浅井・朝倉軍を破る 本願寺と石山戦争を始める⑫
1571	延暦寺を焼打ちする⑤
1573	将軍義昭を追放＝室町幕府滅亡⑥
1574	伊勢長島の一向一揆を平定する⑦
1575	長篠合戦で武田勝頼を破る⑧
1576	安土城の築城開始⑨
1577	根来・雑賀一揆と交戦する⑩ 羽柴秀吉に中国を攻めさせる⑪
1580	本願寺と和睦＝石山戦争が終了⑫
1582	天目山の戦いで武田氏を滅ぼす⑬ 秀吉に備中高松城を攻めさせる⑪ 本能寺で明智光秀に襲われる⑭

京都入各まで

畿内・北陸の平定

天下布武への戦い

本能寺で明智光秀に襲われる⑭

統一の経過

への歩み

東北地方の乱立

平定

頼朝

❸足利義昭をたて入京 1568

❻室町幕府を滅ぼす 1573

⑭本能寺の変 1582
全国統一は未完となる。

❹姉川の戦い1570
北近江・北陸平定の足がかりとなる。

⑬天目山の戦い1582
信濃・甲斐を平定。

❷稲葉山城の戦い1567
美濃を手中にする。

❾安土城築城1576

❺延暦寺焼打ち 1571

❽長篠合戦 1575
足軽鉄砲隊が武田の騎馬軍団を破る。

❿根来・雑賀一揆と交戦 1577

❶桶狭間の戦い1560
翌年，徳川家康と同盟を結び，上洛へ。

⑦伊勢長島の一向一揆を平定1574

⑪中国攻め1577～
秀吉が山陰を攻略したのち，82年，備中高松城を水攻め。

⑫石山戦争1570～80
本願寺顕如が門徒に呼びかけ挙兵。長期戦となる。78年，織田水軍は本願寺側の毛利水軍を破る。

南部

最上義光

伊達輝宗

芦名

相馬

那須

岩城

佐竹

上杉景勝

春日山

村上

真田

滝川一益

柴田勝家軍

佐々成政

一乗谷

結城

稲葉山

府中

北条氏政

国友

織田信長

明智光秀

安土

京都

吉川元春

羽柴秀吉軍

小早川隆景

毛利輝元

高松

丹羽長秀軍

堺

筒井順慶

徳川家康

北畠信雄

根来

長宗我部元親

松浦

亀造寺隆信

大友義鎮

大村純忠

有馬晴信

島津義久

以前は南相馬市
現在は相馬市
ＪＲ駅名も相馬駅

原子力発電所
浜通りは海岸線に沿って

元国府
野馬追いは
2012/7/29～
相馬～原町

① 東北地方
1:1 500 000
0 5 10 20 30 40km
多円錐図法（全体としてひずみが小さい）

○主要都市

五、全国統一への歩み

頼朝と信長は志半ばで短命に終わった。

1192年　鎌倉幕府を樹立し、将軍として頼朝は朝廷に代わり、全国に国司に代わる守護大名を配置し、武士による人事権を掌握した。
戦の功績に対し、千葉一族（千葉常胤）や三浦一族（三浦義澄）に全国各地の一族の統治を任せた。東北の太平洋側（仙台から南）に相馬氏を配置、かたや会津は中心に三浦一族の芦名氏を配置。九州においても三浦一族の大友氏（大分）と千葉一族（鹿児島）を配置したが、常胤は親族に任せて自身は赴任せず。しかし（後）源頼朝の配下で平家の残党狩りを行った。
さらには壱岐と対馬の国司として、短い期間ではあるが三浦一族を配置した。

戦頭

ここで　頼朝の全国統一の課程を述べる。（4頁の右上）

関ヶ原がキーと頼朝が確信していた

先ず、源頼朝は二分割（朝廷と武士）の権力を、武士による、権力で統治する。
そして、執権の専任を排除し、まして、元天皇の院政を排除し、天皇の朝廷政治を国民に理解出来る、朝廷にする。即ち国民が頑張れば、報われる仕組みにより、透明な法治にする。
一方、武士による傍若無人の者は幕府が武力で鎮圧し、平和裏に獲得した開拓地はこれを保障する、等々の仕組みは信長、秀吉、家康が全国統一した下地作りとなった。

豊か故に反戦闘的、逆に誇り高く家族の団結力は強力
食生活良く、長生き。親方（トップ）に従順、組織内の親方職は避ける。
親方は私利私欲なく、子孫に任せる。故に領地領民は常に将来を考え、創意工夫し、かつ、職種を身に付ける。

三浦一族と千葉一族の共通性を述べる。

イ、共に小粒の戦闘集団（200騎）
ロ、海洋民族である。
ハ、住む土地が200万年前後にほぼ同時期に海底から隆起した我が国最後の国土であり海底は豊富な栄養分が含まれている。　土地が肥えてる
ニ、気候が温暖で住みやすい。
ホ、黒潮の流れる太平洋に面する地形は北西の高い山岳に囲まれている。
ヘ、従って、生活的に豊かな環境であり、子沢山で家族一同集団生活し、自給自足出来きたし、助け合いが必要不可欠な生活圏。
ト、従って、自然に基礎体力も育ち、協調的である。

手、かつての氏族（三浦と千葉）はお互いを戦さした事はない。
かつ親子の親族も戦さはしてない

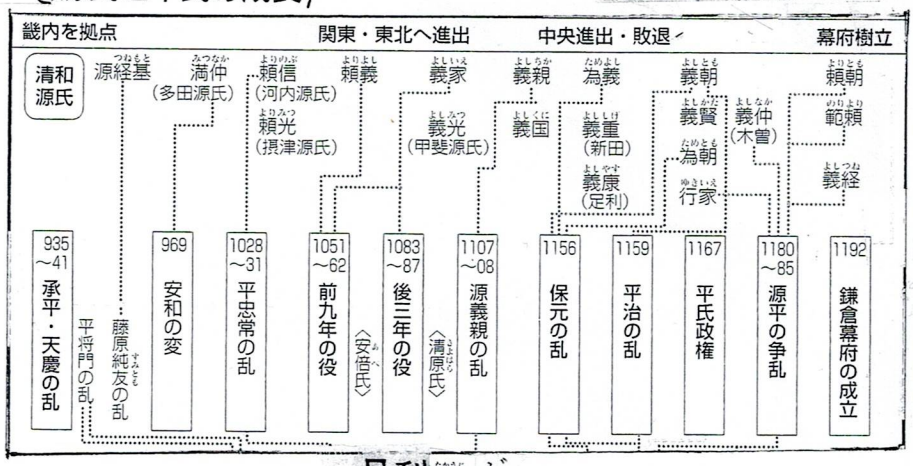
親内

前九年の役(1051〜62)・後三年の役(1083〜87)——奥州でも争乱

上総や陸奥の乱を平定した源氏が東国で地盤を固めた。
また，東北では，平泉を中心に奥州藤原氏が繁栄した。

奥州藤原氏の成長

源氏と平氏の成長



「日本」と「天皇」のはじめ

倭(倭国)に代えて「日本」を国号とし，王あるいは大王に代えて「天皇」を称号とするようになった時期はいつか。多くの研究者は，大宝律令(701)に「日本の天皇」とあるところから，その前提となった飛鳥浄御原令(689)で日本も天皇も公式に定まったのではないかと考えている。

なお，天皇については，天智朝あるいは天武朝からすでに使われはじめたと考えられていたが，1998年に飛鳥池遺跡から「天皇」と「丁丑年」(677)の文字がある木簡(右)が出土して，それを裏づけた。

摂関政治——藤原道長が頂点をきわめる

摂関政治の構造

1192	後白河法皇が死去 源頼朝が征夷大将軍となる
1198	後鳥羽上皇が院政を開始 (院に西面の武士を設置)

源頼朝

❶源頼朝(1147〜99)

鎌倉幕府の成立と支配体制

武士による土地支配

源平の戦い——関東から九州にわたる戦い

東北平定

足利尊氏が

1338年室町幕府を開設

大日本帝国憲法下の政治機構

元老・重臣 (首相の推薦など)	天皇 統治権の総攬者 神聖不可侵
内大臣 (常侍輔弼)	

モンゴル・元の東アジア侵攻

鎌倉幕府の滅亡と南北朝の動乱

鎌倉幕府の滅亡から南北朝の対立

幕末の動乱

天皇	将軍	動向	年月	おもなできごと
	徳川家定	幕府独裁	1854. 3	日米和親条約調印
			1855.10	堀田正睦が老中主座に就任
			1858. 2 (安政5)	堀田正睦が条約勅許を奏請
			4	井伊直弼が大老に就任
			6	日米修好通商条約調印
				徳川斉昭らが条約調印に抗議
				次期将軍に徳川慶福(家茂)が決定
			9	安政の大獄(〜59年)
			1860. 1 (万延1)	安藤信正が老中に就任
			3	桜田門外の変(井伊直弼暗殺)⑪
			閏3	五品江戸廻送令
			1861.10	和宮が将軍家茂に降嫁(公武合体)
	家茂	公武合体派 対 尊王攘夷派	1862. 1 (文久2)	坂下門外の変(安藤信正襲撃)⑫
			4	寺田屋事件
			5	薩摩藩主の父，島津久光が勅使大原重徳とともに東下。将軍に幕政改革をせまる(文久の改革へ)
孝明			8	生麦事件⑬
			1863. 3 (文久3)	新選組結成
			5	長州藩が下関で外国船を砲撃⑭
			7	薩英戦争⑮
			8	天誅組の変⑯
				八月十八日の政変(七卿落ち)⑰
			10	生野の変⑱
			1864. 3 (元治1)	天狗党の乱(〜12月)⑲
			6	池田屋事件
			7	禁門(蛤御門)の変⑳
				第1次長州征討(〜12月)㉑
			8	四国艦隊下関砲撃事件㉒
			1865.10	安政の五カ国条約勅許(兵庫開港除外)
			1866. 1 (慶応2)	薩長連合(同盟)成立㉓
			5	幕府が英米仏蘭と改税約書調印
			6	第2次長州征討(〜8月)㉔
			12	徳川慶喜が将軍に就任
				孝明天皇が急死
	慶喜	公議政体派 対 武	1867. 5 (慶応3)	兵庫開港に勅許
			6	坂本竜馬が「船中八策」を立案
			7	「ええじゃないか」発生㉕
			9	薩長芸3藩が挙兵討幕を約定
			10	大政奉還を前土佐藩主の山内豊信が幕府へ建白
				薩長両藩に討幕の密勅が下る
				将軍慶喜の大政奉還上奏に勅許が下る
			12	王政復古の大号令。朝廷が小御所会議で将軍慶喜の辞官納地を決定

明治

3 承久の乱(1221)

◉承久の乱とその結果

❶後鳥羽上皇(1180〜1239)
隠岐に流され一生を終えた。

後鳥羽上皇
- 朝廷の権威回復をめざす
- 西面の武士を新設
- 寺社の武力を誘う
- 西園御家人を誘う

北条義時
- 源実朝暗殺⇒源氏断絶
- 御家人の動揺

義時追討の院宣

全国統一の経過

織田信長

❸足利義昭をたて入京 1568
↓
❻室町幕府を滅ぼす 1573
↓
⑭本能寺の変 1582
全国統一は未完となる。

豊臣秀吉の統一への歩み

徳川家康の統一への歩み

天下分け目 関ヶ原の戦い

豊臣秀吉の死後，石田三成と徳川家康の対

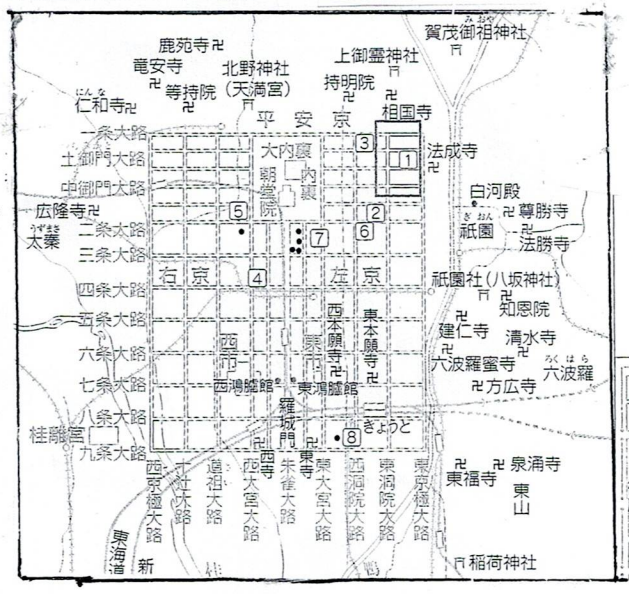
江戸幕府の成立

院政と平氏政権の経過

天皇	上皇	年	院政関係事項	平氏関係事項
後三条		1068	後三条天皇が即位	
		1069	延久の荘園整理令を発令 記録荘園券契所を設置	藤原氏と外戚関係にない 後三条天皇の国政改革
		1072	宣旨枡を制定	
白河		1086	白河上皇が院政を開始 (院に北面の武士を設置)	
堀河	白河	1098	源義家が院の昇殿を許される	
鳥羽		1108		平正盛が源義親を討つ
崇徳	鳥羽	1129	鳥羽上皇が院政を開始	
近衛		1132		平忠盛が内昇殿を許される
後白河		1155	後白河天皇が即位	
		1156	保元の乱(皇室・藤原氏の内部対立に武士がからむ)	
二条	後白河	1158	後白河上皇が院政を開始	
		1159	平治の乱(平清盛と源義朝が争い，清盛が勝つ)	
六条		1167		平清盛が太政大臣となる
		1172		平徳子が高倉天皇の中宮に
高倉		1177	鹿ケ谷の陰謀	
		1179	平清盛が院政を停止し，後白河法皇を幽閉する	
		1180	以仁王・源頼政らが挙兵	
安徳	高倉	1181		平清盛が死去
		1185		平氏一門が滅亡

清盛

長岡京から平安京へ(794)



〔四〕

平常胤（1118~1201年）の紹介

桓武天皇の血を引く関東の名族下総国、国司平常重が、大椎から亥の鼻口（現在の新千葉城）に本拠を移し、千葉を名乗り千葉介と称し、千葉庄や相馬郡、相馬御厨他所領の拡充に尽力した。常重の子、常胤は東の庄（トウノショー　　）に領地を受け、治水、漁業に励んだ。一方、信仰心の篤い足跡は千葉神社の妙見信仰の走りである。

父の常重は常胤に家督を渡し、二代目千葉介となる。

平将門の乱（939年）やその乱後も、人心の乱れと耕作地の荒廃で人々は飢餓に苦しみ、朝廷からの救いの手配もなく、絶望の淵にあった。

他方、朝廷の役人や平家一門に比べて、不平等の不満は収まらず、争いも激化した。

関東の統治者であった平国香も無策で、唯一平常胤の父親の常重は耕作地を開拓し、働く人々が生活出来る環境を作ることに配慮した。

将門の歩んだ様に平忠常は戦（1028~31年）で食糧や領地を略奪の拡大へと進んだが、戦に次ぐ戦で人々は疲弊し、他国へ逃避する者が続出した。

-千葉常胤について

父は下総国司であり、千葉介を名乗る。人望篤く、将門の乱の鎮圧も手こずり、その後も、上総介の平忠常の乱が勃発した。房総全域にて私戦も多発し、焼き討ちも多発し、住民は耕作どころか、房総から他国へ逃げ出す人たちが増加した。本来は、関東の平家一門を統括する立場にある、国香が無為無策であった。

朝廷は忠常の乱を鎮圧すべきと源頼信を任命し、源氏方に参戦したのが、三浦一族と千葉一族と平広常であった。

この反乱も忠常の降伏で決着したが、房総の再建が急務であった。

常胤の父親常重も一族の総力を挙げて各々の私的開拓地を再建かつ拡大を進めた。まだ常胤の父親が健在の直期、常胤は秩父一族の娘と結婚し、嫡男（胤正）をもうけた。常胤（22歳）、二男、三男も誕生した。

亥の鼻台に家族一同で苦労しつつも、楽しい我が家を味わいつつ労苦に打ち込んだ。

常重は所有する千葉の庄と相馬御厨の開拓に打ち込んだ。

ところが、朝廷から、「相馬御厨の伊勢神宮への供給が無い」との有罪判断で相馬御厨の私的開拓地を「佐竹氏へ渡せ」と命じられた。

常胤は反論を繰り返したが、決着出来ず、打てる手配は徒労に終わった（裏に平清盛と藤原一族の計らい）

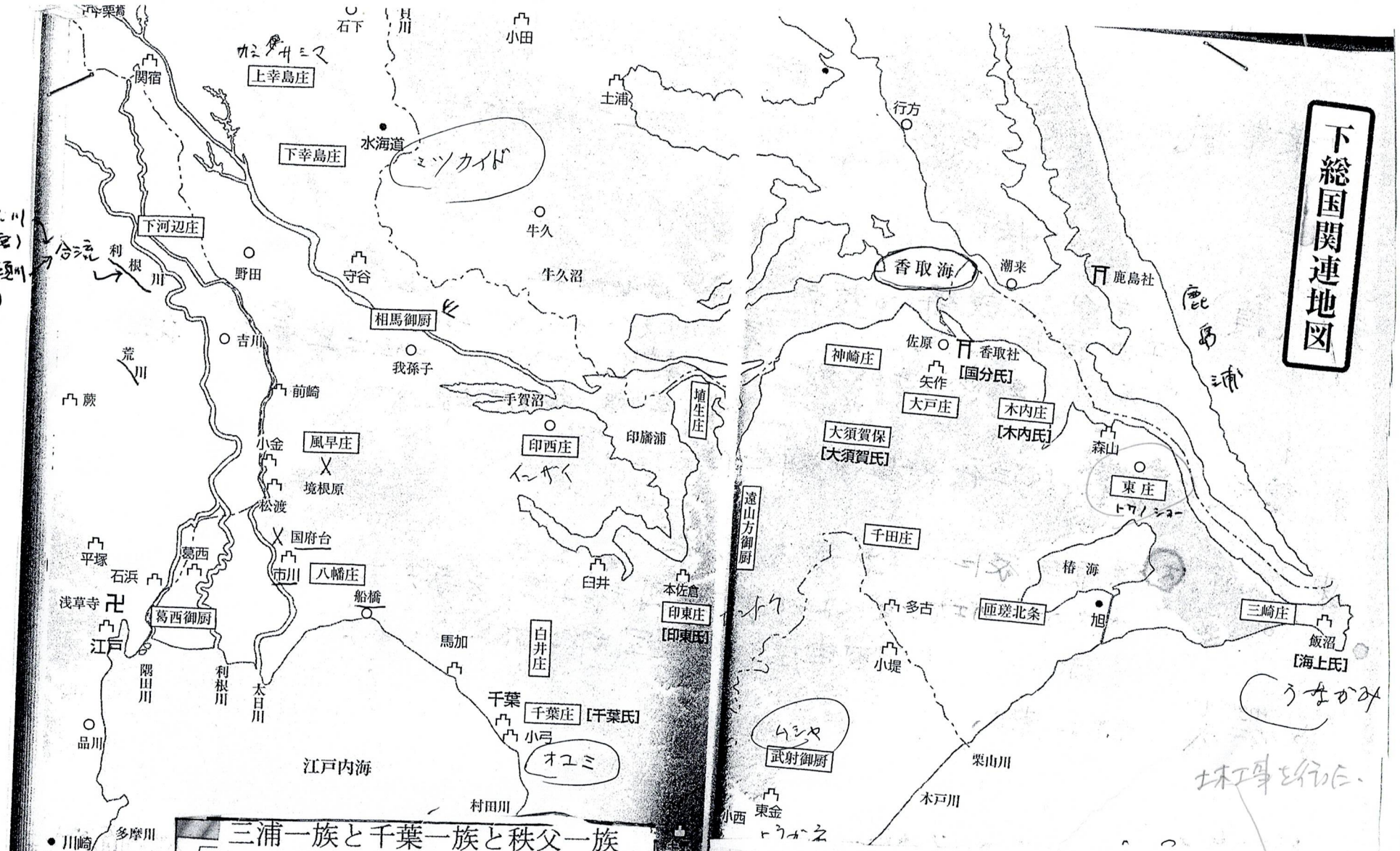
納得出来ない苦労も有った。

次ページ（5-）は下総国開墾地図。

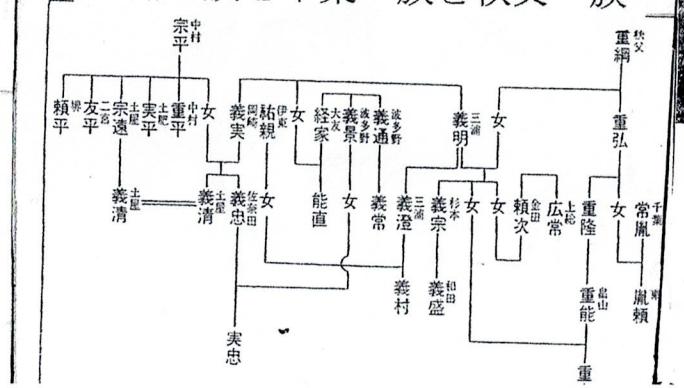
と

6頁は千葉六党（-6-）の説明に入る。

下総国関連地図



三浦一族と千葉一族と秩父一族



常胤の新婚生活の亥鼻台生活から離れ、常重から東庄の運営を任された。利根川の河口近くで氾濫にも繰り返し復興に体を張って、治水に勤めた。暫くして頼朝の挙兵があり、韮山の山本代官を刺殺、焼き払い、石橋山にて戦いが開始し、頼朝と北条は千葉へ逃げ延びた。海上で三浦一族と合流した。これを聞き、常胤は急ぎ、子息正胤を上総の伊北庄司へ攻撃指示し長狭一族を刺殺し、千葉一族は三浦一族と合流するために三浦一族と頼朝の到着を待った。頼朝が下総から鎌倉に入り富士川の快勝後、急ぎ上洛しよう、と頼朝が焦った。その時、今は関東を治めるが先と広常、義澄、常胤が同意見で体制を整えること、頼朝も承知した。

新聞 読用

歴史の交差点

富士通FSC特別顧問 山内昌之

幕末維新期は、日本人なら誰でも興味をそそられる時代である。おまけに、西郷隆盛、高杉晋作、勝海舟といったスター級の登場人物にも事欠かない。なかでも、司馬遼太郎が描いた坂本龍馬は、今なら野球の大谷翔平選手や将棋の藤井聡太六冠くらいの有名人だったと錯覚させるほどの輝きを放つ。

しかし残念なことに、歴史の実像は文学の虚像とは相当に異なる。龍馬の場合もそうだ。最近出された町田明広編『幕末維新人物事典』（講談社）は、歴史の虚実を冷静に分析する研究最前線の最新時代像を知る上で格好の書物である。

神田外語大教授の町田氏によれば、龍馬が塾頭に就いたのは、幕府の神戸海軍操練所ではなく勝の私塾であり、亀山社中も実在しなかったらしい。彼が薩長同盟を成立させる一翼を担ったことは間違いないにせよ、龍馬一人の功績ではなかった。また、船中八策の存在そのものを否定する学者もおり、大政奉還も龍馬だけの手柄とは言いがたい。こうなると、大方の日本人の龍馬像がガラガラと崩れ落ちかねない。もっとも、この責任はわれわれ読者が勝手に龍馬を理想化しすぎる非歴史主義的思考にもあるといえよう。

もっと地味なところでは、日本史教科書にある親藩・譜代・外様などの区分も最近では重視されないことだ。老中といえば譜代大名が就く職だと思い込んでいた人には、幕末に蝦夷福山城主の外様大名が老中に就いたことを知って驚くかもしれない。この福山とは松前のことである。徳川林政史研究所研究員の藤田英昭氏によると、老中は3万石以上の城主が務める。譜代・外様を問わず、徳川の「臣下」なら就任できるというのだ。

常識否定の幕末維新史

ところが、彼らが属した徳川の「国」ではなく、別の「国」の主と見なされた「国主」という格式の大名たちがいた。国主は幕政に関与できない。前田・島津・伊達・黒田・細川などの国持大名は、徳川の領国とは別の「国」の主であり、徳川は原則的に彼らの領地に介入できなかった。彼らはあくまでも「客分」なのである。客がさまざまな幕府役職に就くのはおかしいのだ。従って、国主大名は老中や側用人らだけが入れた「奥」の部屋に呼ばれることはない。この理屈を無視する映画や小説も多い。

龍馬の役割だけ強調されがちの大政奉還も、最近では何故に徳川慶喜が自分から進んで権力を手放そうとしたのか、新たな解釈が出されている。これまでは、慶喜は本心では将軍中心の徳川絶対主義路線を考えていたと主張する学者もいた。最近では、むしろ慶喜は朝廷中心の公議政体で自分が主導権を取り、天皇を形式的に上に立てながら、自分が朝廷の中心を占める政権構想を練っていたという見方も強い。司馬遼太郎は慶喜を優柔不断と日和見の徒として描きがちだが、実際には冷静に自他の力関係を測り、熟慮を重ねながら大政奉還などの重要事項に決断を下したという大東文化大教授、久住真也氏の主張も説得的ではないか。

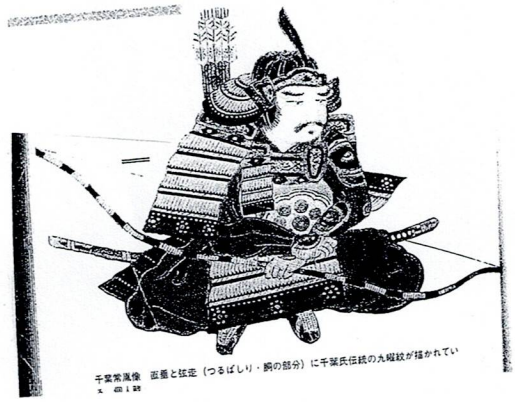
（やまうち まさゆき）

2018年（平成30年）1月号

生誕900年 千葉常胤（つねたね）の容姿（イメージ）

特集 9

千葉大学内パンフ

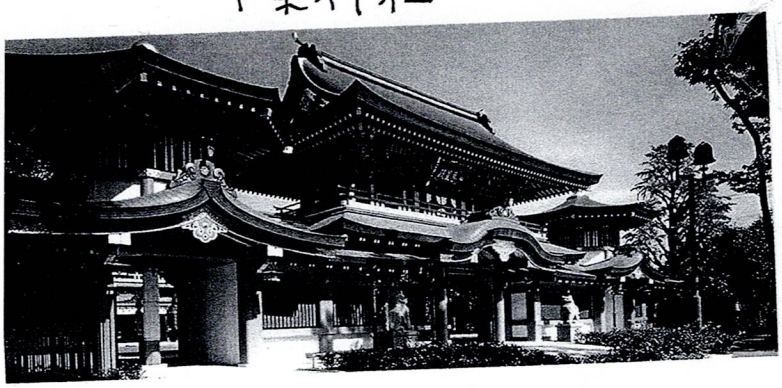


千葉常胤像 面懸と弦巻（つるばしり・胸の部分）に千葉氏伝統の九曜紋が描かれている

鈴木佐氏出版タスク（P-6）

千葉市役所広報

千葉神社



千葉介常胤像
（千葉市立郷土博物館蔵）

古代より住民、海人がお参り

（奥屋は平安京以降）